

するのよの人は侍ことかな、

〔台記〕天養元年九月十二日庚申、今春中門廊軒際雀生子、其子成長有斑毛、常飛來此亭、衆欲取之不得、左近府生秦公春取之獻、余○頼長藤原見之頭及上喙羽白、背如常雀足赤、愛賞殊甚。

〔宇治拾遺物語三〕今はむかし、春つかた日うら、かなりけるに、六十計の女のありけるが、虫うちとりてゐたりけるに、庭に雀の玄ありきけるを、童部石をとりてうちたれば、あたりてこしをうちをられにけり、羽をふためかしてまどふほどに、鳥のかけりありきければ、あな心う、からす取てんとて、此女いそぎてとりて、いき玄かけなどして物くはす、小桶に入てよるはおさむ、明ればこめくわせ飼菜にこそけてくはせなどすれば、子ども孫など、あはれ女などじは老て雀かはるるとて、にくみわらふ、かくて月比よくつたへば、やうくおどりありく、雀の心にもかくやしなひいたるを、いみじくうれしくと思けり、あからさまに物へいくとても、人に此すゞめみよ、物くはせよなどいひおきければ、子まごなど、あはれなんでう雀かはる、とて、にくみわらへども、さばれいとおしければとて、飼ほどに飛ほどに成にけり、今はよも鳥にとられじとて、外にいで、手にすへて、飛やするみんとてさ、げたれば、ふらふらとびていぬ、女おほくの月比日比、くるればおさめ、明ればものくはせならひて、あはれや飛ていぬるよ、又來やするとみんなど、づれづれに思ていひければ、人のわらはれけり、さて廿日ばかりありて、此女のゐたるかたに、すゝめのいたくななくこゑしければ、すゞめこそいたくなれ、ありしすゞめのくるにやあらんと、思いで、見れば、此すゞめ也、あはれにわすれずきたること、あはれなれといふほどに、女のかほをうちみて、ぐちより露ばかりのものを、おとしおくやうにしてとびていぬ、女なに、かあらん、すゞめのおとしていぬる物はとて、よりてみれば、ひさごのたねをたゞひとつおとしてをきたり、もてきたる様こそあらめとて、とりでもちたり、あないみじすゞめの物えて寶にし給とて